

2010年3月期 第3四半期決算説明会



ZeeM

株式会社クレオ
2010年2月2日



決算概要

2010年3月期 第3四半期(累計)決算概要

(百万円)

	売上	営業利益	経常利益	四半期純利益
10/3月期	6,953	△79	△67	△56
09/3月期	9,133	△32	△7	△109

(全体)

- 受注環境の悪化により法人系事業を中心に前期に比べて減収減益。四半期純利益の改善は保有株式の売却によるもの。

(セグメント別状況)

- システム開発事業は、IT投資抑制や顧客内製化による受注環境の悪化により、売上、利益とも減少
- ZeeM事業は、商談数の増加により増収増益、利益面においては製品開発費の償却負担額減少により大幅に改善
- コンシューマサービス事業は、主要製品のシェアを拡大したものの、市場の縮小により売上、利益ともに減少
- モバイル事業は、IT投資抑制や顧客内製化による受注環境悪化により売上、利益ともに減少
- サポート&サービス事業は、顧客内製化により売上、利益ともに減少
- その他事業は、サイオとパワーウイングスが連結除外となったため、売上、利益ともに減少

2010年3月期 第3四半期(累計)決算概要

(百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
10/27予想 (A)	7,000	△180	△180	△160
Q3実績 (B)	6,953	△79	△67	△56
増減額 (B-A)	△47	101	113	104
増減率	△0.7%	—	—	—

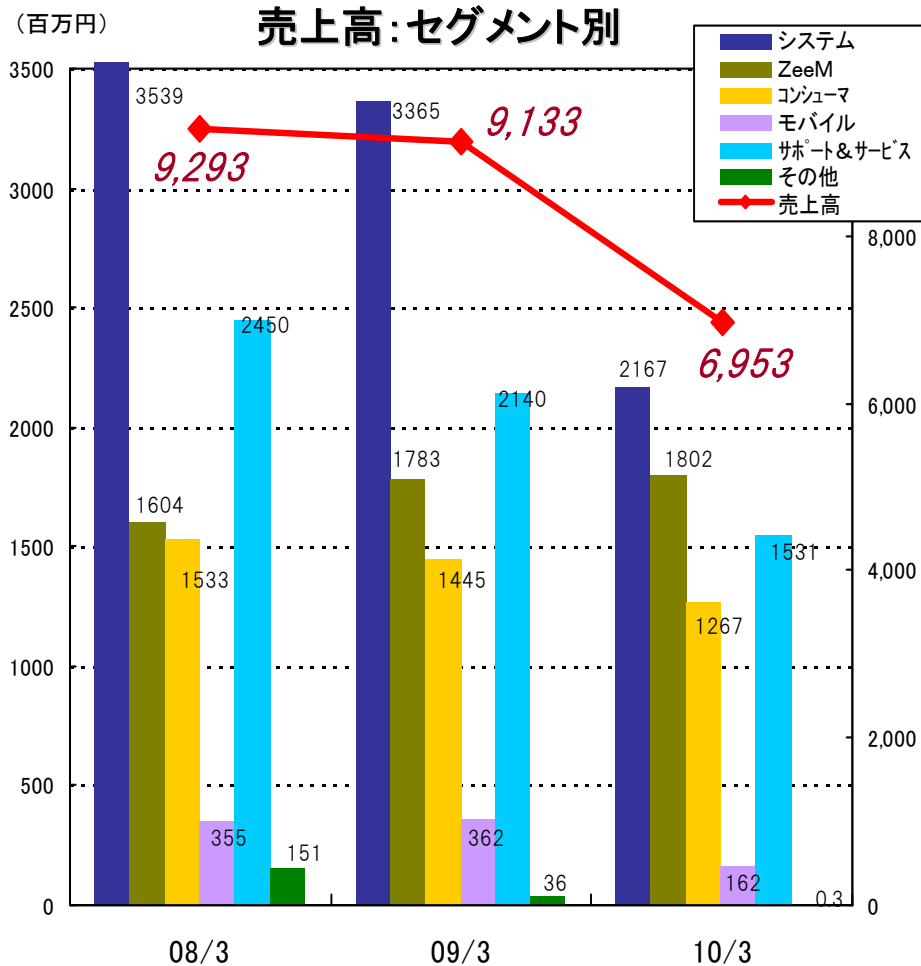
【修正の理由】

当社を取り巻く事業環境は依然として厳しい状況にあり、設備投資抑制や顧客の内製化などにより各事業において売上の伸長に影響をうけ売上が伸び悩んだ。

利益については、第3四半期においてシステム開発事業、ZeeM事業、モバイル事業は概ね予定通り推移したなか第2四半期に引続きコンシューマ事業の「筆まめ」が好調な出荷であったこと、経費削減により予想を上回った。

経常利益、四半期純利益についても営業利益の増加に伴い増加した。

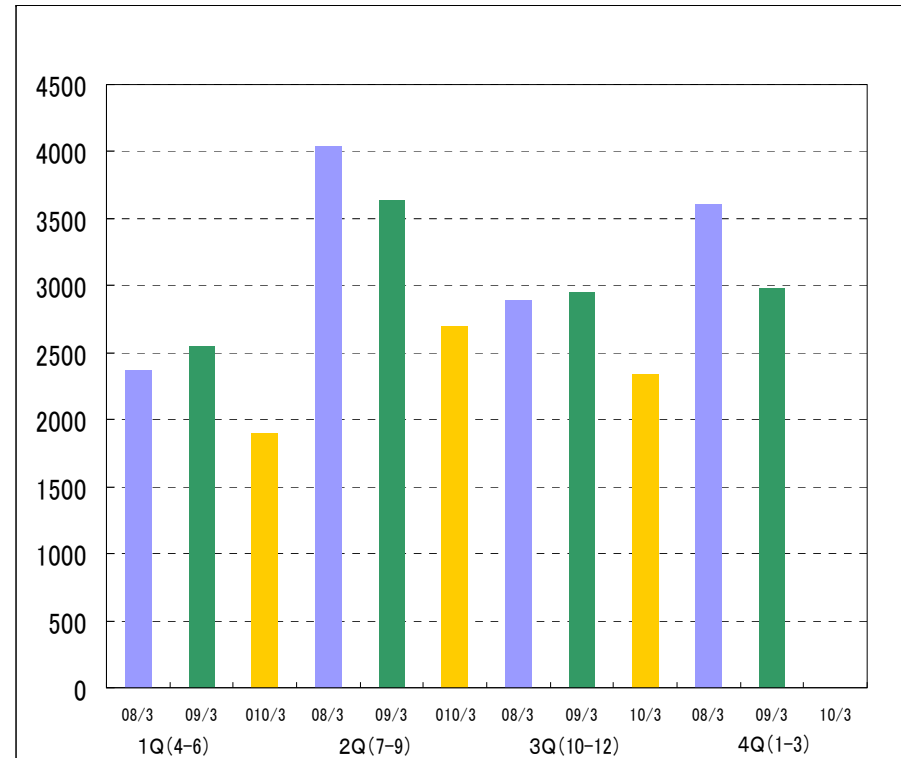
2010年3月期 第3四半期(累計)決算の概要(売上)



■主としてシステム開発事業とサポート&サービス事業のIT投資抑制や顧客内製化による受注環境の悪化により全体的に売上が減少

■ZeeM事業は保守サービスの増加により売上増加

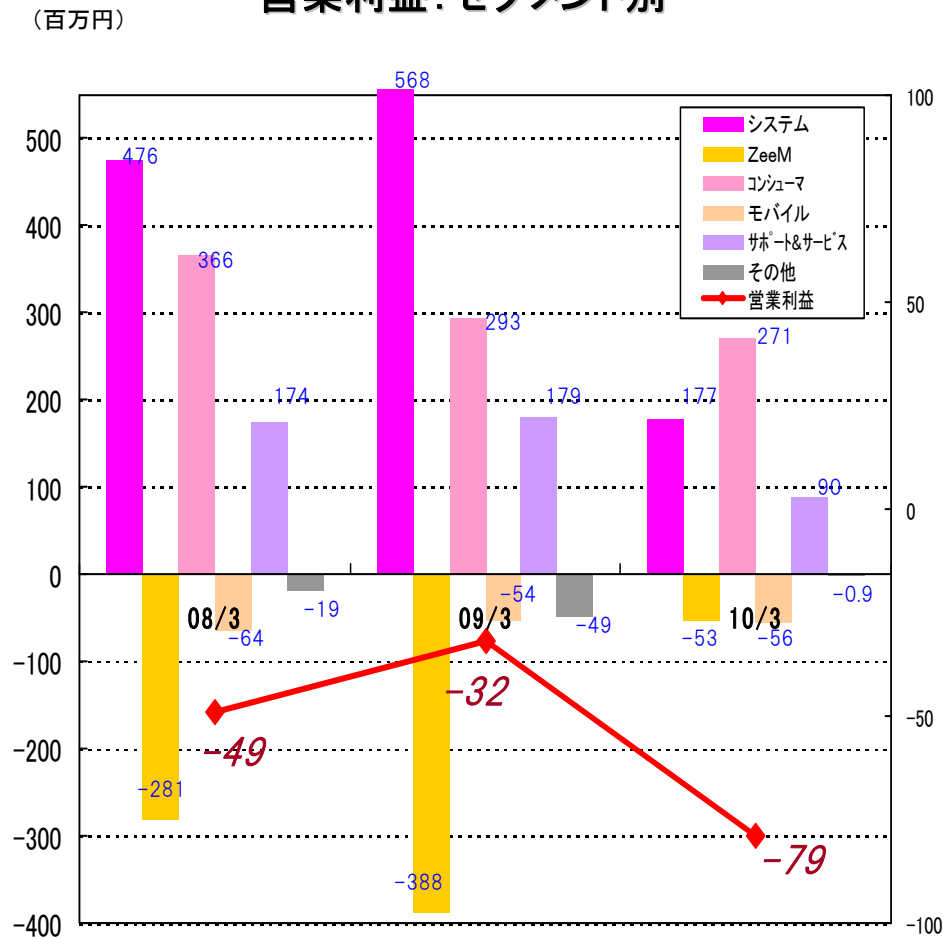
売上高:四半期推移



	1Q	2Q	3Q	4Q
08/3	2,368	4,033	2,892	3,599
09/3	2,554	3,631	2,947	2,986
10/3	1,893	2,701	2,359	—

2010年3月期 第3四半期(累計)決算の概要(営業利益)

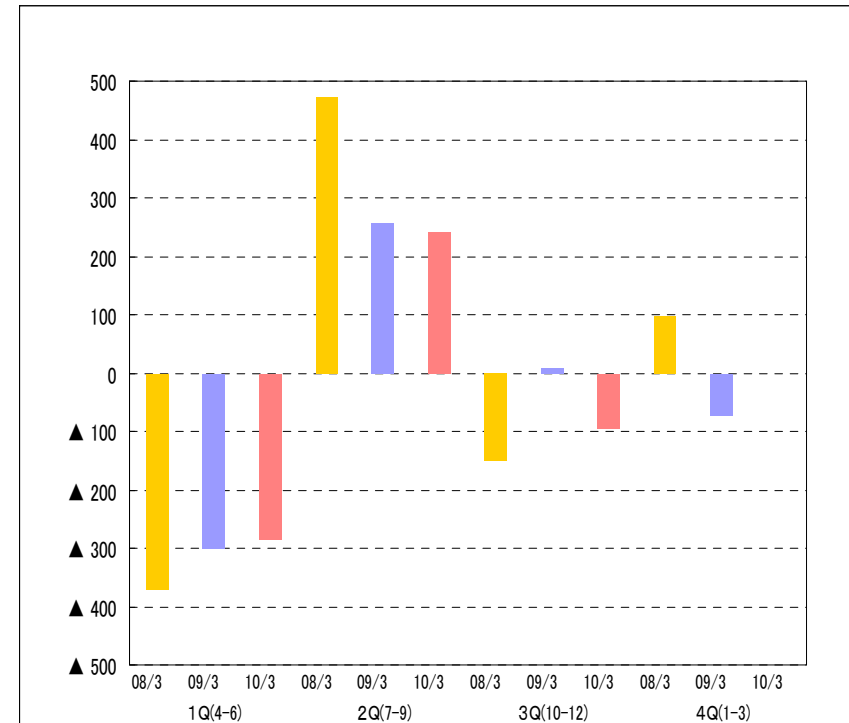
営業利益:セグメント別



■ 売上の減少に伴い減少

■ ZeeM事業は償却負担額減少により大幅改善

営業利益:四半期推移



	1Q	2Q	3Q	4Q
08/3	-371	472	-150	98
09/3	-301	258	10	-73
10/3	-285	242	-35	—

2010年3月期 第3四半期(累計)損益計算書の概要

〔百万円未満は切り捨て〕

主な科目	2009/12末			2008/12末	
	金額	構成比	増減	金額	構成比
売上高	6,953	100.0%	△2,180	9,133	100.0%
営業費用	7,032		△2,133	9,165	
営業利益 (△は営業損失)	△79	-1.1%	△47	△32	-0.4%
営業外損益	12		△12	24	
経常利益 (△は経常損失)	△67	-1.0%	△60	△7	-0.1%
特別利益	46		43	3	
特別損失	8		△26	34	
税引前四半期純利益 (△は税引前四半期純損失)	△29	-0.4%	9	△38	-0.4%
法人税等	35		△56	91	
少数株主利益 (控除)	△8		11	△19	
四半期純利益 (△は四半期純損失)	△56	-0.8%	53	△109	-1.2%

増減ポイント

- ・売上高および営業損益については決算ハイライトの通り
- ・営業外損益:
前期は事業損益運用益が発生
- ・特別利益:
当期は株式売却による発生
- ・特別損失:
前期は関係会社株式売却による発生
- ・法人税等:
前期は連結納税の導入により繰延税金資産の引当計上
- ・少数株主利益
サイオの連結除外により損失が減少

2010年3月期 第3四半期(累計)貸借対照表の概要①

〔百万円未満は切り捨て〕

主な科目	2009/12末			2009/9末	
	金額	構成比	増減	金額	構成比
資産合計	6,414	100.0%	34	6,380	100.0%
流動資産	5,408	84.3%	65	5,343	83.7%
現金・預金	2,781		178	2,603	
受取手形及び売掛金	1,894		△204	2,098	
棚卸資産	578		139	439	
その他	158		△48	206	
貸倒引当金	△3		0	△3	
固定資産	1,005	15.7%	△31	1,036	16.2%
有形固定資産	183		△11	194	
無形固定資産	491		△18	509	
のれん	109		△12	121	
その他	382		△5	387	
投資等	330		△2	332	

増減ポイント

流動資産

・受取手形及び売掛金:

システム開発事業等の
9月末債権回収による減少

・棚卸資産:

システム開発事業による
仕掛増加

2010年3月期 第3四半期(累計)貸借対照表の概要②

[百万円未満は切り捨て]

主な科目	2009/12末			2009/9末	
	金額	構成比	増減	金額	構成比
負債合計	2,315	36.1%	92	2,223	34.8%
流動負債	1,936		86	1,850	
買掛金	245		△98	343	
短期借入金および社債	180		5	175	
その他	1,511		179	1,332	
固定負債	379		7	372	
長期借入金および社債	178		△2	180	
その他	200		8	192	
純資産合計	4,094	65.2%	△62	4,156	65.1%
資本金	3,149		0	3,149	
資本剰余金	1,428		0	1,428	
利益剰余金	△360		△54	△306	
自己株式	△122		0	△122	
株式等評価差額金	0		0	0	
少数株主持分	3		△4	7	
負債純資産合計	6,414	100%	34	6,380	100%

増減ポイント

流動負債

・買掛金:

内製化および売上減少に伴う
減少

・その他:

賞与引当金、未払消費税の
減少

2010年3月期 第3四半期(累計)キャッシュフロー計算書の概要

〔百万円未満は切り捨て〕

区 分	2009/12末		2008/12末
	金額	増減	金額
営業活動CF	63	△214	277
税金等調整前四半期純損失	△29	9	△38
減価償却費	214	△198	412
売上債権の増減額(増加:△)	132	△24	156
たな卸資産の増減額(増加:△)	△310	△97	△213
仕入債務の増減額(減少:△)	△123	117	△240
その他	179	△21	200
投資活動CF	△435	△235	△200
有形固定資産の取得	△3	81	△84
無形固定資産の取得	△275	△23	△252
定期預金の預入	△330	△230	△100
その他	173	△63	236
財務活動CF	△65	88	△153
長期借入金の返済による支出	△6	50	△56
自己株式の取得による支出	0	0	△20
その他	△59	18	△77
現金及び現金同等物の期末残高	2,051	△410	2,461
3ヶ月超の定期預金残高	730	629	101

増減ポイント

営業活動キャッシュフロー:

当期は減価償却費等の非資金科目の減により減少

投資活動キャッシュフロー:

当期は3ヶ月超の定期預金預入により増加


2010年3月期の計画

(百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
2009年3月期 実績	12,119	△105	△77	△504
2010年3月期 通期予想	10,900	10	10	10

■通期見通し

- ・第3四半期は利益面で上方修正となったが、受注環境の不透明さが継続しており、4/28/09予想を継続。
- ・引き続き、各公表値の着実なクリアーを目指す。



第3四半期までの進捗および 今後の方向性

全社重点方針 〈2009年度3月期決算説明会(2009/5/1開催)方針内容の確認〉

(1)黒字達成

⇒現時点では、通期黒字化に向けて進行中。

(2)新たなビジネススタイルの確立

⇒新たなビジネススタイルの確立に向けて、いくつかの動きが出ているが、結果が出るまでには至っていない。

(3)人材育成の強化

⇒低コストでの教育を重点的に展開中。

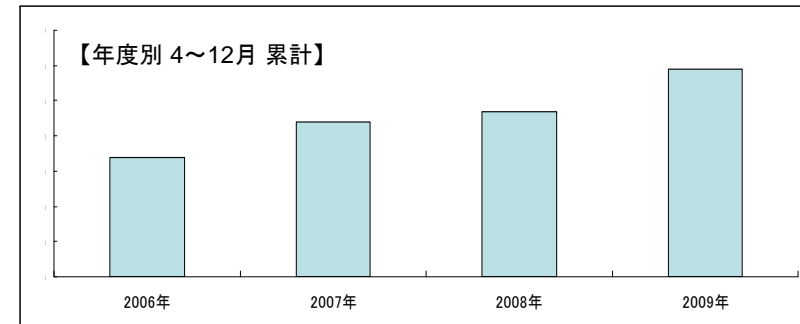
(4)コミュニケーションの活性化

⇒黒字化達成に向けての努力の中で、上記の取り組みに関しては多少のスローダウンを余儀なくされている状況。

ZeeM事業（進捗状況）

(1) 事業セグメントとしての通期黒字化を果たす。

⇒ 厳しい状況下で、導入社数が
20%アップ（対前年同期）。
セグメントとして通期黒字化に
向けて努力中。



(2) スtockビジネス重視の仕組みを既存顧客へ浸透させ、
短期から中期の成果につなげる。

⇒ 子会社(株)クレオスマイルは、ほぼ計画通りに推移中。
足元だけでなく中期の視点で、顧客深耕を推進中。

(3) ユーフィット、インテックグループを始めとするパートナー戦略を
深耕する。

⇒ 複数商談・商材で、多角的に推進中。

パートナー支援の一環で12月17日にパートナーフォーラム開催。

トピックス

・12月16日、IFRS対応セミナー開催、150名の参加

システム開発事業（進捗状況）

- (1) 社会インフラ系と福祉介護を始めとする公共系の更なる深耕を図る。また、効果が出始めたPMO活動の継続・深耕を図る。
⇒引き続き市場環境が厳しい中、受注の拡大に努めている。
第4Q以降の公共関連市場の立ち上がり期待。
品質については活動が効果を発揮し、不採算PJ発生の押さえ込みに成功。
- (2) ヤフー向けシステム開発は、新たなビジネスモデルを確立する。
⇒ヤフー殿のサービス外販が成果を挙げつつある。
今後の拡大に期待。
- (3) 新規得意分野の確立へ向けて、トライアルを強化する。
⇒映像分野については、放送局向けに最初の受注を獲得。
これを梃子に受注拡大を図る。
また、海外向新規ビジネス(メーカと連携)については、順調に伸びており、来期更なる拡大が期待される。

コンシューマサービス事業(進捗状況)



- (1) 筆まめ・プロアトラスなどシェアNO.1製品のシェア・利益を維持・向上させる。
⇒ 筆まめ新製品(Ver.20)は、年末の店頭市場で前年比で100%以上の販売実績を達成し、市場シェアを大幅に伸長。
業界紙BCNの「BCNアワード」では、毛筆ソフトとDTPの2部門でアワードを受賞。
- (2) 筆まめonlineなどのネットサービスの事業化を加速し、前期実績の倍増を目指す。
⇒ 筆まめonlineの対前年同期比(4~12月)の伸び率はPV:150%、UU:200%、売上:約3.7倍と堅調な伸びとなった。
- (3) コンシューマサービスのビジネスインフラ(営業体制・サポート体制など)を活用して、パッケージ展開を多様化する。
⇒ 『筆まめおつきあい帳』を昨年12月に発売。

モバイル事業(進捗状況)



- (1) 昨年市場導入したクロスモビの市場への普及を加速させる。
⇒クロスモビWebサイトへのアクセス件数は増加傾向だが、
景気の影響か成約率は依然低水準の状況。
大きなコストをかけられる状態ではないため、Web中心に
絞ってプロモーション展開。
- (2) Flash技術をキーにしたソリューション商談を拡大させる。
⇒上期に受注実績が出たが、その後新規商談獲得に繋がらず、
Flash以外の新たな目玉を模索中。
- (3) 事業単体の通期黒字化を目指す。
⇒新規の営業チャネル・顧客は増加傾向。一方、既存顧客か
らの受注減少が大きく、全体として受注減状態が続いている。

サポート&サービス(進捗状況)



- (1) 厳しいマーケット環境に対応し、新たな顧客開拓を強化する。
⇒新規業務・新規顧客の開拓は少しずつ進んでいるものの、既存顧客の業務内製化による受注減が大きい。
更なる拡販を図ると同時に、確実な利益獲得のため、コスト削減を徹底して進行中。
- (2) 経営の品質・効率をさらに向上するため、新たな認証取得を目指す。 例)BCMS
⇒5月8日に取得した『BS25999-2:2007』(所謂BCMS)を梃子に品質アピールで市場拡大を展開中。
- (3) 適用業務範囲の拡大と深化を目的に、人材教育の強化を図る。
⇒引き続き、資格奨励などを徹底して、要員のスキルアップを推進中。第3Qでは話題の仮想化技術の資格取得者も複数でており、新たな業務分野の拡大が期待される。

その他(進捗状況)



- (1) 全社的な経費・原価削減運動を展開し、黒字化を支援する。
⇒経費削減運動は、当初設定した年度の削減目標をクリアする
目処がたった。全体収支での目標達成が、まだ確実視される
状況でないため、手を緩めることなく、引き続き展開する。

- (2) 実運用に入った内部統制、引き続き重要課題であるセキュリティ
等コンプライアンス活動の維持・向上を図る。
また、こうした取り組みを外販し、黒字化に貢献する。
⇒内部統制については、監査法人の指導を受けながら、
問題ないレベルで進捗中。
また、セキュリティ・マネジメント・システム構築の外販では、
今般、当社がコンサルした会社が、ISMSの認証を取得。
コンサル業務として、初の具体的な実績であり、今後この分野
でのビジネスの拡大が期待される。

— ご清聴ありがとうございました —



<IR窓口> 株式会社クレオ 広報IR室 : TEL03-3445-3539

本資料に記載される見通し、今後の予測、戦略などに関する情報は、本資料作成時点において、当社が合理的に入手可能な情報に基づき、通常予測し得る範囲でなした判断に基づくものです。しかしながら、現実には、通常予測し得ないような特別事情の発生または通常予測し得ないような結果の発生等により、本資料記載の見通しとは異なる結果を生じるリスクを含んでおります。

当社といたしましては、投資家の皆様にとって重要と考えられるような情報について、その積極的な開示に努めて参りますが、本資料記載の見通しのみで全面的に依拠してご判断されることはくれぐれもお控え下さるようお願いいたします。

なお、いかなる目的であっても、本資料を無断で複写・複製、または転送などを行わないようにお願いします。